

論文題目: 日本映画の英語字幕における標準化—制作プロセスの観点から—

英文題目: Standardization of English Subtitles for Japanese Films:

A Study Focusing on the Production Process

提出者: 篠原 有子

授与機関: 立教大学

取得学位の名称: 博士(異文化コミュニケーション学)

学位取得の方法: 課程

取得年月日: 2017年3月31日

要旨

本論文は、日本映画に付けられる英語字幕に着目し、字幕制作プロセスが訳出にどのような影響を及ぼすのかについて考察を行った。字幕翻訳は視聴覚翻訳における主要な研究領域であり、言語的、社会的、認知的アプローチによって様々な研究が行われてきた。英語文献を調査した限りでは、そうした論考の多くが、英語映画を起点テキストとする字幕を対象としたもので、非英語映画に付けられる英語字幕についての考察は限定的である。しかし、非英語映画を世界的に展開するには英語が鍵となる言語であることから、英語字幕も多数制作されている。日本においても海外市場を目指す日本映画の増加に伴い、多くの作品に英語字幕が付けられている。本論文は日本映画に付けられる英語字幕をテーマとし、英語字幕の訳出にどのような特徴があるのかについて、字幕制作プロセスや想定される視聴者など様々な点に着目し、翻訳学におけるローカリゼーション・モデルの「国際化(internationalization)」プロセス(ピム, 2010)、および「標準化(standardization)」(Toury, 2012[1995])と「パトロネージ(patronage)」(Lefevere, 1992a)の概念に依拠して考察を行った。

本論文は次の二つを研究目的とした。第一の目的は、英語字幕の訳出に影響を与える要因の特定である。本稿では特に英語字幕の制作プロセスに焦点を当てて検討した。具体的には、基軸言語としての英語、英語字幕視聴者の多様性、起点主導で行われる制作プロセスの特性などを取り上げ、それらと訳出との関係性について探った。第二の目的は、そうした要因によって生じる英語字幕の訳出上の特徴についての考察と検証である。本論文では、インタビューや文献調査から英語字幕の訳出に関する仮説を導き出した後に、事例研究によって仮説の検証を行った。

理論の枠組みとしては、「ローカリゼーション・モデル」(ピム, 2010)を採用した。ローカリゼーションとは、ある製品を多くの地域に販売しようとする場合、販売対象となる地域にその製品を言語的、文化的に適合させることである。本来はデジタル製品やウェブ上の製品に関して用いられる概念であるが、ローカリゼーション・モデルに含まれる国際化プロセスと英語字幕制作プロセスと

の共通性に鑑み、同モデルを英語字幕の訳出について考察するための枠組みとした。また、「標準化(standardization)」と「パトロネージ(patronage)」を鍵概念とした。標準化とは翻訳によって起点テキストの持つ特異性が低減化され、平易で一般化されたテキストになることを指す。本論文では標準化を「起点テキストに含まれる性質や特徴が低減されること」と再定義し、この定義に基づいて英語字幕の訳出について検討した。もう一つの鍵概念であるパトロネージは、英語字幕翻訳の促進や阻害をもたらす権力の行使を表す。この概念を用いて、英語字幕の制作に影響を与える組織や政策の役割、訳出に関わる参与者間の相互作用について考察した。

本論文の構成は次の通りである。第1章では、英語字幕が増加している背景と、海外の日本映画受容における英語字幕の重要性を明らかにしたうえで、本研究の目的を述べた。第2章では先行研究を概観しながら、字幕研究において制作プロセスの重要性が認識されてこなかったことを指摘し、制作プロセスに関する考察の必要性を喚起した。本論文が「ローカリゼーション・モデル」と同モデルを構成する「国際化」プロセスを理論的枠組みとすることについては、第3章で論じた。同章ではローカリゼーションが英語字幕訳出についての考察に有効であることを述べると同時に、鍵概念として、「標準化(standardization)」と「パトロネージ(patronage)」を導入した。続く第4章では本論文の研究方法としてインタビュー、文献調査、事例研究を用いたことを述べ、インタビューの対象者、実施方法、文献調査の内容、事例研究の対象作品、分析方法などについて説明した。第5章では最初に字幕制作プロセスを記述し、次に字数制限や映画の多重コード性など字幕翻訳のプロセス上の特性およびそれが訳出に及ぼす影響について検討した。これを踏まえて、第6章においてパトロネージ、英語字幕の中間バージョン性、視聴者の多様性への対応、英語の優位性などの観点から、英語字幕の標準化仮説を導いた。第7章は仮説の検証を目的とした事例研究である。日本映画『Shall we ダンス?』および『千と千尋の神隠し』のアメリカ版DVDを用いて、起点テキストに含まれる異文化要素が、英語字幕にどのように訳出されているのかを分析し、異文化要素訳出に採用された方略の使用頻度を提示した。この分析結果を基に、第8章では標準化の定義に合致する方略を「標準化方略」と定め、全体の方略使用頻度に占める標準化方略の割合(標準化率)について検討した。また、字幕の新動向として、近年広がりつつあるユーザー生成型翻訳とそれによって産出される非標準的の字幕を、グローバリゼーションとの関連から論じた。

以上の考察をまとめると次のようになる。最初に、英語字幕の訳出に影響を及ぼす要因として、英語字幕の中間バージョン性、制作プロセスの特性、英語の優位性の3点に着目し、訳出への影響について述べた。一点目の中間バージョン性についてはローカリゼーション・モデルを枠組みに考察し、国際化プロセスと英語字幕の共通性から、英語字幕が標準化された訳出になると論じた。翻訳を含むローカリゼーションでは、起点テキストから直接多言語化されるのではなく、言語変換を伴う国際化プロセスの工程を経て各言語に訳出される。国際化プロセスでは、ローカリゼーションを効率化するために、起点テキストの中から多言語展開に際して障害となる要素が除去され、平板で標準化されたテキストが作られ、そのテキストを基に各目標言語や目標文化に向けてローカリゼーションが行われる。したがって、国際化プロセスは標準化された中間バージョンを産出するプロセスといえる。一方、非英語映画を多言語展開するに当たっては、起点テキストを一旦英語

字幕に訳出し、その英語字幕から様々な言語に翻訳されることが多い。その場合、英語字幕への訳出は多言語展開のための中間バージョンとなることから、英語字幕制作をローカリゼーション・モデルの国際化プロセスと同等に位置づけることができる。したがって、ローカリゼーション・モデルの国際化プロセスと同様に、英語字幕においても標準化が起きているのではないかとした。二点目として挙げた制作プロセスの特性とは、英語字幕の翻訳が起点文化内で行われることを指す。起点文化内で制作されるために、英語字幕では映画会社、政府による政策、映画監督やプロデューサーといった映画の企画立案関係者がパトロネージという権力を行使し、翻訳対象の選択、英語字幕の制作、そして訳出に影響を及ぼしていると考えられる。このことは、大衆に受容されやすい作品が海外展開作品に選定されたり、分かりやすい英語表現が求められたりすることなどから窺える。また、英語字幕翻訳者自身が視聴者の多様性を認識し、非英語母語話者を想定して「英語らしさ」にとらわれない訳出を行う場合があることがインタビューを通して示唆された。英語字幕制作における翻訳の品質評価では、起点言語と目標言語の両面から目標テキストの品質をチェックできる英語字幕翻訳者は、モノリンガルの参与者よりも権力を有すると考えられる。したがって、翻訳者が標準化された訳出が適切と考えた場合には、その判断が目標テキストに反映されやすくなる。三点目の、英語の優位性に関する考察でも英語字幕の訳出が標準化され得ることが示唆された。英語をリングフランカとして捉えた場合、英語によるコミュニケーションは相互理解を達成することが目的であり、正確さや「英語らしさ」は重要視されない傾向がある。したがって、多くの非英語母語話者によって受容される英語字幕でも、細かなニュアンスや詳細な情報の伝達を目的としたテキストというよりは、一般化され、標準化されたテキストで最低限の情報を伝える訳出になり得る。以上の点から、英語字幕の訳出は標準化されるとの仮説を導いた。

次に、日本映画に付けられた英語字幕の分析によって上述した標準化仮説を検証した。具体的には、『Shall we ダンス?』と『千と千尋の神隠し』の英語字幕を分析対象とし、それぞれの起点テキストに含まれる異文化要素がどのように訳出されているかを、翻訳方略の枠組みを用いて分析した。この分析結果を、別個に行った日本語字幕の分析から得られた標準化の割合と比較した結果、英語字幕の訳出における標準化率は、日本語字幕の標準化よりも著しく高いことが示された。このことから、本論文が対象とした作品について、日本語字幕と比較した場合、英語字幕の訳出は標準化される特徴があると結論づけた。

最後に、字幕の新動向として、近年広がりつつある非標準的の字幕について自律的 (autonomous) 翻訳と他律的 (heteronomous) 翻訳という視座から検討した。従来の翻訳は、翻訳者が外部の発起者からの依頼を受け、様々な規則や要請に従うという他律的な翻訳であり、こうした他律性が標準的な訳出を生み出してきた。それに対して、自律性の高いファンサブなどのユーザー生成型翻訳では、翻訳者自身が発起し、外部からの制約に縛られない創造的な翻訳を行う。本論文では、テクノロジーの進展に裏打ちされたこうした自律的翻訳が、非標準的の字幕を生み出しているとした。また、人とモノの交流を活発化したとされるグローバリゼーションが、標準化と非標準化という、相反する要素を内包していることを踏まえて、グローバル化による翻訳需要の増加が、ファンサブやインターネット上に見られる非標準的の字幕を生み出す要因となっているのではないかと考察した。

このように、英語字幕の中間バージョン性、想定される視聴者の多様性、起点主導のプロセスによる翻訳といった英語字幕の制作プロセス上の特性、および英語の優位性が英語字幕の訳出に影響を与えると考えられること、そして、これらが作用することにより、本論文が分析対象とした作品の英語字幕に標準化の特徴があることを明らかにした。

【著者紹介】篠原有子 (SHINOHARA, Yuko) 立教大学異文化コミュニケーション学部兼任講師。字幕翻訳者。視聴覚翻訳の理論と実践についての研究、および字幕翻訳教育に取り組む。